

LONG DISTANCE CONTROLS (遠距離コントロールのあり方)

このところ、国際あるいは国内大会において 100m を超す遠距離コントロールを多用する傾向が見られ、歯止めが利かない状況もみられる。その事実を重く踏まえた IOF トレイルO委員会では、遠距離コントロールについて一定のガイドラインを示すべく検討を行った。以下はその先取りである。

■遠距離コントロールが生むさまざまな問題

2008年、2009年のトレイルO世界選手権(WTOC)では遠距離コントロールが目立ち、とくに昨年のハンガリーでのWTOCでの第一日では100m超のコントロールが多出した。

遠距離コントロールのもたらす問題としては、次のようなものがある。

- 1、遠すぎてフラッグそのものが視認出来ない。
- 2、フラッグはなんとか見えるが、周辺のコまかい地形や特徴物の確認が出来ない。
- 3、距離の長さに加えて、競技の時間帯により太陽の光線加減で日陰になってフラッグが確認できない場合があり、視認条件に不公平さを生んでいる。



WTOC2009
D1-3 105m



D1-8 135m

D1-3 は木々の作る日陰にあり、正解フラッグは正しい岩がけに設置されていたとはいえ、周辺のコントラストが

非常に弱くて、それぞれのフラッグの確認が困難であった。

D1-8 は、遠距離で、しかも微細なフラッグ・セッティング・コントロールの例。円の中心に非常に近場所にフラッグが近接して立っている。ある者はフラッグ設置の誤差の範囲だと言ったし、またある者は、意図的にZであると批評した。これは、遠距離と、微細すぎるフラッグ・セッティングのコンビネーションが「Z」に使用された例。

■遠距離コントロールに関する推奨事項

討議を重ねた結果 IOFトレイルO委員会では、次のような考え方をまとめ、TGL(テクニカル・ガイドライン)に反映することとなった。

IOFトレイルO委員会は、遠距離コントロールが地図読みとトレイン観察(というトレイルOの原則)から外れて、きびしい視力テストにならないように助言する。

われわれの分析によると、遠距離コントロールにおける視認性に関する課題では、一般的に視界が75mを超えるとそのコントロールの難易度が大きく増してくる。したがって、われわれは以下のことを提唱する。

■めやすの距離は 75m

コース・プラナーとコントローラは、遠距離コントロールの設置にあつては、その距離が75mを超えると本来要求される地形読みよりも競技者の視力テストになってしまうケースに陥りやすいことに留意しなければならない。

そしてまた、もしもそのような遠距離コントロールが用いられる場合には、競技の時間帯を通して全てのフラッグが明確(クリア)に視認できるコントロールかどうかについてチェックすることが要求される。

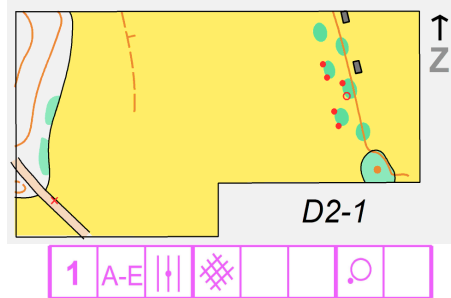
フラッグ視認の条件—すなわち、異なった日照条件=日陰・日なたの下であっても背面・背景(バック・グラウンド)に対してフラッグのコントラストが良好に保たれているか、風による障害はどうか、あるいは気象条件の変化などについても想定し、注意を払う必要がある。

■75mを超える場合の「Z」はクリアであること

またコース・プラナーとコントローラは、遠距離コントロールにおいて通常規格の(小さな)フラッグの設置位置を用いた「Z・正解なし」コントロールを作る場合は、特徴物に対するフラッグ位置が明らかに確認できるように留意する必要がある。遠距離コントロールにおいては微細なフラッグ位置を課題にするべきではない。

明白なフラッグ位置を心がけても、遠距離からの「Z」判定は難しい。

■成功した遠距離コントロールの例



これは WTOC 2004(スウェーデン)での例。DP からは 140 m と遠いが、DPのある路上を移動することで、最初は重なって一つのかたまりに見えていた藪群がそれぞれに判別できるようになり、東側の建物との位置関連で正解の藪が限定できる。フラッグもクリアに確認でき、たとえ遠距離であっても成功した例といえる。

以上、長距離コントロールに関する IOF トレイルO委員会の見解を説明したのは、「地図を読み、トレインを観察し比較する」というシンプルなトレイルOの原則である。常に意識したいものだ。

(こやま たらう)

★TempO 国際大会へ！！

この夏の WTOC2010 の終了後の 13 日に、TempO の初の国際大会 THE TEMPO TROPHY (テンポ・トロフィー)がトロンハイムで開催される。今回はトライアルの感じだが、2013年にはいよいよ世界選手権種目としてお目見えする見込みである。ますます広がるトレイルO・ワールドではある。